

平成 29 年度地域特別研修会 障がい者スポーツ指導者交流研修会報告書

日時：2017 年 12 月 9 日（土）13:00～16:30

場所：沖縄大学

報告者：研修部会 永野典詞

※原則として「障がい」の「がい」は「かな」の表記としている。内容（正式名称など）によって、一部を「障害者」と表記している。

参加者：30 名（沖縄大学学生）、障がい者スポーツ指導員 12 名、スタッフ 8 名

1. 開会

【挨拶】

- ◇ 障がい者スポーツ指導者協議会九州ブロック会長 山口幸彦 氏
- ◇ 沖縄県障害者スポーツ指導者協議会会長 上地武昭 氏



2. 「障がい者スポーツの現状と地域振興」

日本障がい者スポーツ協会スポーツ推進部長 水原由明 氏



障がい者スポーツの歴史について、1964 年パラリンピック東京大会から振り返りながら説明された。また、障がい者スポーツの国の組織の担当概要について、現在のスポーツ庁における障がい者スポーツの振興について説明された。

さらに、スポーツ庁の「第 2 期スポーツ基本計画～障害者スポーツ関係～」第 3 章「今後 5 年間

に総合的かつ計画的に取り組む施策」として、1 スポーツを「する」「みる」「ささえる」スポーツ参画人口の拡大と、そのための人材育成・場の充実、について紹介された。その中で、障がい者スポーツ指導者の養成の拡充（2.2万人～3万人）、活動する場がない障がい者スポーツ指導者の半減（13.7%～7%）など、障がい者スポーツ指導者の必要性と活躍の場の広がりについて話された。

次に、都道府県・指定都市の障がい者スポーツ協会と日本障がい者スポーツ協会の連携、都道府県・指定都市の障がい者スポーツ指導者協議会（51都道府県・指定都市）の組織、事業部（研修部会、情報部会、指導部会、トレーナー部会）について説明された。

また、障がいの概要として3障がい（身体、知的、精神）の理解の必要性、スポーツの役割（スポーツの意義）について話され、自分の生活時間を自立することで増やすこと、生きがいを持つこと、活動の場を広げることなどの効果を力説された。

国内外の障がい者スポーツ競技大会について、パラリンピック、アジアパラゲームズ、ジャパンパラリンピック、各競技団体主催競技大会、全国障害者スポーツ大会などの枠組みについて説明があった。2013年度65歳以上の障がい別人数をみると、身体障がい者の約70%が65歳以上であり、この人たちへのスポーツの導入など、対象者に適応したスポーツの必要性を話された。

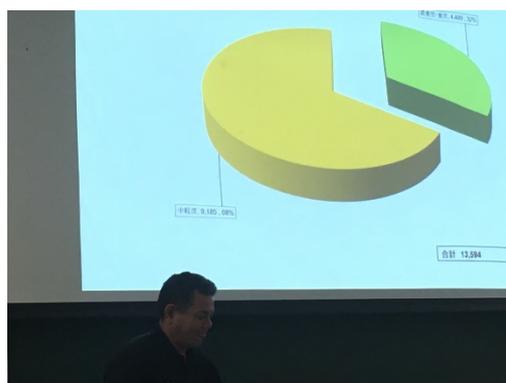
最後に、障がい者スポーツ指導者の進路と活動のステージとして体育・スポーツ系、介護・福祉系、保育系、医療系の障がい者スポーツ指導者養成校の進路について話され、多様な選択肢があることが理解できた。そして、障がい者スポーツの普及・振興にあっては、①地域活動への積極的参加→活動の場を広げる、②障がい者との交流→活動への自信を身につける、③資質を高め指導力の向上に努める→専門性を高め、安心・安全で競技力向上に繋げる、ことの重要性について報告された。

3. 「障がい者スポーツ指導者協議会について」

障がい者スポーツ指導者協議会九州ブロック会長 山口幸彦 氏

沖縄県障害者スポーツ指導者協議会 運天健 氏 仲本潔 氏

まず、山口会長から、障がい者スポーツ指導者協議会九州ブロックの組織について説明された。組織として、会長、事務局、九州8県に指導者協議会があり、専門部会として情報部会、研修・研究部会、指導部会、クラス分け部会、トレーナー部会がある。九州では他の地域にはない、クラス分け部会（全国大会、ジャパンパラリンピックなどのクラス分け）、トレーナー部会（体調、障がい、補装具などの管理）があることが報告された。また、九州各県障がい者スポーツ指導者協議会事務局の紹介があった。



次に、仲本氏から沖縄県障害者スポーツ指導者協議会の組織、活動状況について説明された。主な活動は以下のとおりである。

- 宮古、八重山障害者スポーツ大会への指導員の協力
- 全国障害者スポーツ大会九州ブロック予選会派遣への協力
- 沖縄県身体障害者スポーツ大会の運営協力（アーチェリー、卓球、SST、水泳、フライングディスク、陸上など）
- ゆうあいスポーツ大会への協力
- 全国障害者スポーツ大会派遣に伴う協力～練習会、派遣
- 沖縄県フライ大会の協力
- 南部トリムマラソン大会への協力
- その他、各種イベントへの協力参加

その他、写真を交えてバレーボール競技大会（精神）、バスケットボール競技（知的）、グランドソフトボール競技、車椅子バスケットボール競技、沖縄県障害者スポーツ大会、全国障害者スポーツ大会などの説明があった。

4. 実技「ボッチャ」上級スポーツ指導員／スポーツコーチ 藤井康司 氏（日本ボッチャ協会強化スタッフ）



今回は、沖縄ボッチャクラブの選手2名に参加していただき、デモンストレーションや指導を受けることができた。また、実技のテーマは競技ボッチャを体験することである。パラリンピックに出場するボッチャ競技の選手が実践している練習であり、海外で戦うために必要な練習法として、大量得点を狙い、かつ、相手に三点取られないために必要な戦術を学んだ。

ボッチャのルールをデモンストレーションで説明し、次に上述の練習を行った。まず、6つのコートで、それぞれ2つのチームに分かれ、バスケットボールをターゲットにボールを投げ合い、コート内でどちらに押し込めているかを競うトレーニングなどを行った。練習の後、それぞれのチームに分かれて試合形式のゲームを行った。参加者はそれぞれにボッチャを楽しんでいた。

【受講者の感想】

今回参加した学生の感想の一部を以下に示す。

Aさん（沖縄大学4年生）：地域における障がい者スポーツがどのように行われているかを知ることができた。これまでは、先生の紹介によるスポーツ教室情報を入手していたが、これからは自分から地域のスポーツ指導者協議会などに情報を取りに行きたい。また、ボッチャの本格的な練習を学ぶことができた。

Bさん（沖縄大学4年生）：とても楽しかったです。選手と一緒にボッチャを学ぶことは良い経験になりました。また、楽しく練習やゲームに取り組むことができ良かったです。これからも、障がい者スポーツに取り組んでいきたいと思いました。また、障がい者スポーツの歴史を学ぶことができた。大学では障がい者スポーツの歴史までは学んでいなかったのがためになりました。